

肥満者の減量治療長期継続方法の検討

| | |
|-----|---|
| 著者 | 井上 博子 |
| 発行年 | 2005-09-07 |
| URL | http://hdl.handle.net/10422/397 |

氏 名（本籍） 井 上 博 子（大阪府）

学 位 の 種 類 修 士（看護学）

学 位 記 番 号 修 士 第 64 号

学位授与年月日 平成17年9月7日

学 位 論 文 題 目 肥満者の減量治療長期継続方法の検討

論文 内 容 要 旨

| | | | |
|--|-------------------|---------------|-------|
| ※整理番号 | 66 | (ふりがな) 氏 名 | 井上 博子 |
| 修士論文題目 | 肥満者の減量治療長期継続方法の検討 | | |
| <p>【研究目的】</p> <p>本研究は、肥満者に肥満治療プログラムを実施し、減量した体重を長期間継続維持することを目的とした電話や書類での介入指導の有効性をみることである。</p> <p>【研究方法】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 対象：事業所における BMI25 以上の肥満者 2. 研究方法：介入研究とした。減量プログラムを実施してもらい、毎月 1 回体重グラフを郵送してもらい、本人へ月 1 回の手紙と月 2 回の電話にて疑問に答えたり、さらなる指導、支援を実施して、体重の変化を対照群と比較した。 3. 分析方法：毎月の結果を介入群と対照群において比較し、介入の有効性を有意水準 5% の χ^2 検定、t 検定、ウェルチの検定、Kaplan-Meier 法を用いた。 肥満度は BMI を用いて評価した。 <p>【結果】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 介入群では減量行動継続月数が対照群より長かった。 2. 介入群では BMI の減少が対照群より有意に大きかった。 3. 介入後臨床検査値 GOT、GPT、γ-GTP、TG と収縮期血圧に改善を認めた。 4. 介入により 5 ヶ月以上の長期継続が可能となった。 <p>【考察】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 対照群は 6 ヶ月以上継続できなかったが、介入群は全員が 5 ヶ月間の継続ができ、最長は 17 ヶ月と長期継続が可能となっている。その理由は①初回面談時に実施した教育介入と月 2 回は電話にて介入支援を行った。②毎月郵送されてくるプログラムの結果報告に評価を行って返送した。これらの介入支援によって長期継続に対する意欲が亢進された結果と考えられる。 2. 介入前の体重を 10% 以上減量し、かつ 5 ヶ月以上継続できたのは介入群では 61.5% で対照群は 0% あった。 3. 介入前を 100 とした指数は減量後は GOT、GPT、γ-GTP、TG 値と収縮期血圧の項目で減少を認めた。このことから、行動変容面では Prochaska&Diclemente の理論横断モデルの維持期段階に入っていると考えられる。 4. 介入群では生活習慣の改善はウォーキングすること、間食を中止すること、飲み会を減らすこと、脂肪分を減らし食物繊維をふやすことが有意にみられた。 <p>【総括】</p> <p>肥満者の減量プログラムには長期減量継続することが大切である。減量治療を長期継続維持させるためには、教育介入や長期継続のための支援介入を個性に合わせて対応することが重要である。</p> | | | |